

2019年9月9日

田結庄良昭

今回の判定会議資料や要旨は、安威川ダム左岸部の状況が詳細に検討されています。これまで、石英閃緑岩や花崗閃緑岩からなる右岸のF1断層などが中心の話で、風化作用も顕著で掘削が大規模に行われてきました。今回は、中生代の超丹波帯の堆積岩が花崗岩の熱で焼かれたホルンフェルスからなる左岸部の話で、ホルンフェルスが比較的風化作用に強いため、岩級区分が高く問題となっていないでした。

判定会議提出資料から見ると

- ① NO. 15+11～18 で F4 断層沿いに D 級岩盤が分布し、除去となっています。ただし後半の要旨で述べられているように、100cm 未満の場合は、あまり処理しないとしており問題です。F4 断層沿いには 10～60cm の D 級岩盤があり、掘削しコンクリートで処理すべきです。
- ② F6 断層付近では CL 1 ～D 級岩盤があり、止水板が機能せず、止水板を硬い岩盤に固着させるため、2 m ずらせるなど深刻な問題があります。
- ③ NO. 11 や NO. 15, No. 16 付近には凹部が存在し、モルタルで埋めたり、細粒ロックで埋めるなど、問題が残っています。一部では水が溜まっており、処理が必要ですが一部無処理になっています。
- ④ 非 No. -3+10 では CL 1 岩盤があるほか、浮石が存在する。浮き石はすべて除去すべきで、ホルンフェルスでは軟らかい泥層の中に硬い砂岩層やチャートなどがレキ状に含まれているメランジュと呼ばれる地質構造のため、硬い石が浮き石になりやすく、

数多くあるので、全て除去に多大な困難を伴う。付加体の地質からなる超丹波帯での特有の地質なので、本来、不均質の岩石の混合からなる岩質のため、浮き石は避けられない状況にあります。根本的な処理が必要です。

- ⑤ またオーバーハングも見られ、コンクリート打せつですむのか問題があります。

次に要旨を見てみると、

- ① 先に述べた断層沿いのD級岩盤を30cm未満は無処理と書かれており、100cm以上を処理とするのは一貫性を欠いています。すべて掘削処理すべきです。
- ② F16断層では1-3cmの粘土（多分断層ガウジ）と30cmのD級岩盤が断層沿いに分布し、その写真も貼付されています。通常の処理と軽く扱われているが、重要な問題で、処理法をさらに具体的に明示すべきである。

さらに、F13、F6断層でもCL1～D級岩盤があり、止水板が機能しないと記されて、固着しないので、2mもずらして処理すること、詳細な検討が必要です。さらに変質部が発達しており、D級岩盤が存在し、それも30cm未満は無処理とのこと。処理すべきです。

- ③ 湧水については、1L/min以上について処理し、汲み上げやポンプを用いるとしているが、1L/min以下は無処理となっています。水は岩盤の劣化や透水性にも影響するので、湧水は全て処理すべきです。ヒューム管やポンプ処理すべきで、湧水はダム基盤に大きな影響を与えるので、完全な処理が求められる。
- ④ また勾配の変更があるが、さらに、具体的に数値をあげて検討すべきです。

最後に議事要旨では、すべて最後の結論部分に、「地盤検査官」の総評があるが、いずれも「すべての取り扱い、岩盤等級、さらに処理が妥当」と、記され慎重な判断がなされていないとしか思えません。